OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	喜びと悲しみのメタファー : Shakespeare のSonnets をめぐって
Author(s)	大森, 文子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 19-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69958
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

喜びと悲しみのメタファー
Shakespeare の *Sonnets* をめぐって[1]

大森　文子

キーワード
Shakespeare, *Sonnets*, 認知詩学，メタファー，感情，Robert Plutchik, 写像、財産、食物、太陽光
（Shakespeare, *Sonnets*, cognitive poetics, metaphor, emotion, Robert Plutchik, mapping, wealth, food, sunlight）

１．はじめに

本稿は Shakespeare の *Sonnets* に見られる感情メタファーを認知詩学の見地から考察するものである。認知詩学は、認知科学、とりわけ認知言語学の知見を用いて文学作品の解釈や構成について考察する分野である（Stockwell（2009: 26）参照）。認知詩学の主要な関心は文学にあるが、日常言語と認知の関係の研究に、認知詩学は数多くの有益な成果をもたらす。日常言語を司る認知の重要な仕組みにメタファーがあるが、文学作品、特に詩作品には豊富なメタファー表現が見られる。文学作品を構成する詩的言語の分析は、認知メタファー研究に益するところが大きい。

Lakoff and Turner（1989）が論じるように、詩のメタファーは単なる修辞的表現ではなく、人間の概念体系の中枢部と大きな関わりがある。概念体系の基礎となるメタファーのプロセスを巧みに利用することにより、詩人は人生の重要な諸問題に読者の注意を喚起する。詩人のメタファー利用の技法には、現実世界の理解に有用な基本メタファーの拡張（extending）、精密化（elaborating）、基本メタファーに対する疑問視（questioning）、複数の基本メタファーの組み合わせ（composition）などがある（Lakoff and Turner 1989: 57-139、215 参照）。

本稿では、Shakespeare の *Sonnets* を研究対象とする。154 篇で構成されたこの作品では、全篇を通して語り手が 1 人称で愛を語る。1 番から 126 番までは美貌の青年に対する愛、127 番以降は “Dark Lady” と称される女性への愛が語られる。愛の喜びや悲しみ、恨みや嫉妬など、愛の諸相が豊かな比喩によって鮮やかに描かれている。本研究では青年への愛を描いた詩群に焦点を当て、そこで表現される感情がどのようなメタファーで描写されるかを観察する。特に喜びと悲しみの感情を表すメタファーに着目し、その意味を概念メタファー理論（Lakoff and Johnson 1980, 1999, Lakoff and Turner 1989, etc.）の立場から考察する。その際に、感情についての心理学研究の権威である Robert Plutchik の研究成果を援用する。

２．Plutchik（1984, 2003）の感情研究

Robert Plutchik（1984, 2003）は、心理学、特に心理進化説（psychoevolutionary theory）の見地から 8 つの基本感情を想定した。喜び（joy）、信頼（acceptance）、恐れ（fear）、驚き（surprise）、悲しみ（sadness）、嫌悪（disgust）、怒り（anger）、予期（anticipation）である。Plutchik はこれら 8 つの基本感情は上記の順で隣接し、円環構造をなすとした。その円環において、類似する感情は角度 90 度以内に位置し、類似していない感情は 90 度から 180 度の間に位置する。例えば喜びと悲しみは反対の概念であり、円環構造においては 180 度離れている（Plutchik 1984:204-205 参照）。

Plutchik は、これらの基本感情を行動と関連づけて考察する。行動遺伝学者 John Paul Scott[2] が提唱した動物の基本行動パタンのリスト（摂食、攻撃、性行為、避難、保護、保護要求、廃棄、模倣、調査）を修正し、生存のための基本行動パタンを次のように列挙する（Plutchik 1984:202 に基づく）。

・摂取（incorporation）のための行動：外界から食物その他の有益な刺激を体内に取り込む。
・排出（rejection）のための行動：体内に摂取した有害物質を体外へと除去する。
・保護（protection）のための行動：危険を回避して自らを守る。身体と危険物との間の距離を取る退却、逃避行動など。

---

[1] 本論文は平成 29 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「英語メタファーの認知詩学」（研究代表者：大森文子）および「英詩メタファーの歴史と構造」（研究代表者：渡辺秀樹）の成果の一部である。

[2] Scott, John Paul (1958) *Animal Behavior*, University of Chicago Press, 1958.

・破壊（destruction）のための行動：切実な欲求の充足を妨げる障壁を壊す。
・生殖（reproduction）のための行動：遺伝物質の交換や混合のために接近し、接触する。
・復元（reintegration）のための行動：所有していた重要なものを喪失し、取り戻そうと希求する。
・適応（orientation）のための行動：新たな見知らぬ対象に接触した時の反応。
・調査（exploration）のための行動：身の回りの環境を調べる。

Plutchik によると、上記の 8 つの行動は、反対関係にある 4 つのペアにまとめることができる。摂取（incorporation）と排出（rejection）は、「入れる」と「出す」、保護（protection）と破壊（destruction）は「逃避する」と「攻撃する」、生殖（reproduction）と復元（reintegration）は「獲得する」と「喪失する」、適応（orientation）と調査（exploration）は環境に対して「立ち止まる」と「動く」という、それぞれ逆方向の動きを伴う行動で、対極の関係にある。

Plutchik（1984）は、これらの基本行動パタンと 8 つの基本感情を結びつける。[3]自らの置かれた環境の中で、何らかの刺激を受けたときに、推論によりその刺激を意味づける認知が生まれ、その認知は感情を呼び起こし、その感情に従って、自らにとって最適な行動が引き起こされ、その結果、生存にかかわる危機や問題等への対処が成立する。【表１】は Plutchik（1984）に示された基本感情を引き起こす典型的な認知と、感情により引き起こされる典型的な行動の対応関係をまとめたものである。[4] Plutchik（2003）ではこの表の「刺激」「認知」「感情」「行動」「結果」の内容をさらに一般化し、全体的にまとめ直している。【表２】を参照されたい。

刺激	推論による認知	感情	行動	結果	
脅威	「危険だ」	恐れ（fear, terror）	逃げる	保護	〉対極
障害	「敵だ」	怒り（anger）	噛む、殴る	破壊	
伴侶になりそうな者	「我がものだ」	喜び（joy, ecstasy）	求愛する、結婚する	生殖	〉対極
かけがえのない者の喪失	「もうだめだ」	悲しみ（sadness, grief）	再会を求めて泣く	復元	
仲間	「友だちだ」	信頼（acceptance, trust）	毛繕いする、分け合う	友好関係	〉対極
恐ろしい対象	「毒だ」	嫌悪（disgust, loathing）	嘔吐する、押しのける	排出	
新たな領域	「あそこにあるのは何？」	予期（anticipation）	調べる、整理する	調査	〉対極
予期しない対象	「これは何？」	驚き（surprise）	立ち止まる、注意する	適応	

【表１】認知と感情と行動の対応関係１（Plutchik 1984:208 に基づく）

刺激	認知	感情	行動	結果
脅威	「危険だ」	恐れ（fear）	逃げる	保護
障害	「敵だ」	怒り（anger）	攻撃する	障害の破壊
価値ある対象の獲得	「我がものだ」	喜び（joy）	保持する	資源の獲得
価値ある対象の喪失	「もうだめだ」	悲しみ（sadness）	泣く	喪失した対象の復元
仲間	「友だちだ」	信頼（acceptance）	毛繕いする	相互扶助
不快な対象	「毒だ」	嫌悪（disgust）	嘔吐する	毒の排出
新たな領域	「調べよう」	予期（expectation）	調べる	領域についての知識
予期しない事象	「これは何？」	驚き（surprise）	立ち止まる	適応にかかる時間の獲得

【表２】認知と感情と行動の対応関係２（Plutchik 2003:109 に基づく）

本稿で取り上げる喜びと悲しみの感情に着目すると、喜びに関しては、価値ある対象を目の前

[3] Plutchik が挙げた 8 つの基本行動のうちの摂取（incorporation）のための行動は、【表１】には反映されていない。
[4] Plutchik（1984）は【表１】の中央の列に示された感情を feeling と呼び、刺激から呼び起こされる認知、感情、それに伴う行動とその結果という一連の連鎖反応全体を emotion と呼んでいる。

にして「これは自分のものだ」という所有（possess）の認知が生じ、それに伴う喜びの感情からその対象を保持するという行動へとつながり、悲しみに関しては、価値ある対象を失ったことから「もうだめだ」という諦め（abandonment）の認知が生じ、それに伴う悲しみの感情から、その対象をもう一度得たいと泣き、対象との結びつきの復元を希求するという行動へとつながることが【表１】および【表２】から見てとれる。

３．Shakespeare の *Sonnets* に見る喜びと悲しみのメタファー

以上の Plutchik の心理学研究の概観により、環境に対する認知と感情の関係を確認し、喜びの感情には所有の認知、悲しみの感情には喪失の認知が関わることがわかった。この研究成果を援用し、Shakespeare の *Sonnets* における、語り手が青年への思いを述べる詩群の中から、喜びと悲しみの感情を比喩的に描いた表現例を観察し、認知メタファー論の観点から考察する。

Shakespeare の *Sonnets* は、ひとつひとつのソネットを単独で鑑賞することもできるが、前後のソネットとつながりのある連作として読むこともできる。そこで、必要に応じてメタファー用例の前後の詩における表現も分析の参考資料として取り上げて観察する。

3.1　利殖の観点から喜びを描くメタファー

本作品は美しい青年を薔薇に喩え、青年が結婚して彼の子孫が増えることを願う詩群から始まっている。1 番の詩は、「たぐいなく美しいものの子孫こそ殖えてほしいのです。そうすれば、美の薔薇が死にたえることはない」[5] (From fairest creatures we desire increase, / That thereby beauty's rose might never die, (Sonnet 1, ll. 1-2)) と始まるが、詩人が話しかける当の青年は、蒼の身におのが財産を埋めたまま、出し惜しみをしながら浪費している (Within thine own bud buriest thy content / And, tender churl, mak'st waste in niggarding: (Sonnet 1, ll. 11-12))。この詩は、青年の美貌を＜財産＞の概念を用いて理解し、子孫を残すべく結婚するという行動を起こさない青年を＜財産を出し惜しみながら浪費する＞、つまり美貌という＜財産＞を有効活用しないという観点から理解するというメタファー思考に基づいている。

続く 2 番では、「かりに、『この美しいわが子こそ、わが富の総決算、私が老いるまで生きた理由です』とこう答えられるなら、きみの美の投資は、はるかに賞賛にあたいする行為になる。子供の美貌がきみのを相続したこともはっきりする。」 (How much more praise deserv'd thy beauty's use, / If thou couldst answer "This fair child of mine / Shall sum my count and make my old excuse," / Proving his beauty by succession thine! (Sonnet 2, ll. 9-12)) と述べられており、ここでも青年の美貌を＜財産＞の観点から理解するメタファー思考が見られる。また、同様に 4 番では、青年に「浪費家の美男子さん、なぜ、きみはわが身ひとりのために美の遺産をついやすのです。」 (Unthrifty loveliness, why dost thou spend / Upon thyself thy beauty's legacy? (Sonnet 4, ll. 1-2)) と語りかけ、「きみの美は投資しなけりゃ、いっしょに墓にいくしかない。」 (Thy unus'd beauty must be tomb'd with thee, (ibid. l. 13)) と青年に忠告している。

上記の 1 番から 4 番の詩に見られるメタファー写像は【図１】のようにまとめられる。

＜財産＞		＜美貌＞
財産		青年の美貌
財産を出資する		青年が結婚して子をもうける
財産を出し惜しむ／浪費する	⇒	結婚もせず、子ももうけない
財産の総決算		子供
相続された富		子供に受け継がれた美貌

【図１】青年の美貌を財産の観点から理解するメタファー

上記のメタファー写像と感情の関わりが述べられるのは、6 番のソネットである。ここでは、＜財産＞から＜美貌＞へのメタファー写像に基づき、青年に子をもうけることを勧め、子供ができたときの喜びを、利息が殖えることになぞらえて描いている（以下、本稿における詩の引用で

[5] 本稿では、ソネットの詩行の日本語訳については高松雄一訳（『ソネット集』岩波文庫、1986）を引用する。

太字で示した語は筆者による強調である)。

(1) Then let not winter's ragged hand deface
In thee thy summer, ere thou be distill'd:
Make sweet some vial; treasure thou some place
With beauty's treasure, ere it be self-kill'd.
That use is not forbidden usury,
Which **happies** those that pay the willing loan;
That's for thyself to breed another thee,
Or ten times **happier**, be it ten for one;
Ten times thyself were **happier** than thou art,
If ten of thine ten times refigur'd thee:
Then what could death do, if thou shouldst depart,
Leaving thee living in posterity?
Be not self-will'd, for thou art much too fair
To be death's conquest and make worms thine heir. (Sonnet 6)

この詩の 1 つ前の 5 番の詩では、美貌の青年を夏の花に喩え、「夏の花から蒸留した香水をとっておかないと、いわば、ガラス瓶に液体の囚人を閉じこめておかないと、美がつくりなすものも、美も、ともに奪いとられてしまう。あとには、美も、美の思い出もなにひとつのこらない。」(Then, were not summer's distillation left, / A liquid prisoner pent in walls of glass, / Beauty's effect with beauty were bereft, / Nor it, nor no remembrance what it was: (Sonnet 5, ll. 9-12)) と、花から香水を蒸留してガラス瓶に保存することに喩えながら、青年の美の遺伝子を後世に残すことを勧めている。この表現を受けて、(1) に引用した 6 番では、「冬のあらくれた手がきみの夏を醜いすがたに変えるまえに、ご自分を蒸留してしまいなさい。」(1-2 行目) と、香水の比喩を再度用いて子孫を残すことを勧めた上で、続く 5-10 行目では、青年の美貌を財産の観点から捉えるメタファーに戻って「高い利息を取っても、支払人を喜ばせ、幸せにするのなら、そういう高利をむさぼるのは何も禁じられているわけではない。つまり、それはきみのためにもう一人のきみを殖やすことだから。いや、たとえ十倍の利息を取っても、幸せが十倍になるだけだ。きみに子供が十人できて、きみの姿を十倍に殖やすなら、きみはいまより十倍も幸福になる。」と主張する。ここでは【図 1 】の＜財産＞から＜美貌＞へのメタファー写像の拡張 (Lakoff and Turner 1989 参照) がなされ、＜美貌の子孫を残す＞ことを＜財産を増やす＞という観点から理解するメタファーへと展開している。【図 2 】を参照されたい。このメタファーでは、青年を貸付人に喩え、青年と結婚して子を産む女性を、青年から借金をして利息を払う債務者に喩える。つまり、青年にとっての結婚はいわば女性への出資で、その結果生まれる子供は、いわば出資の結果生まれる利息という捉え方である。

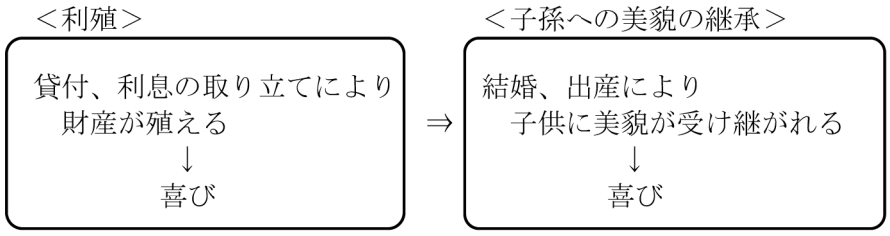
＜利殖＞		＜子孫への美貌の継承＞
貸付人		青年
債務者		女性
貸付人の財産		青年の美貌
貸付人が財産を出資する	⇒	青年が女性と結婚する
債務者が利息を支払う		女性が子供を産む
利息		子供
利息により殖えた財産		子供に受け継がれた美貌

【図 2 】子孫への美貌の継承を利殖の観点から理解するメタファー

(1) では、この利殖のメタファーに基づき、利息を取る貸付人も、利息を支払う債務者も、殖えた利息によって幸福になる (6、8、9 行目) と述べられている。利殖により財産が殖える喜びに喩えて、青年の美貌が後世に継承されることの喜びが描かれているのである。

大森 (2018) では、Shakespeare の *Sonnets* や *Romeo and Juliet* を観察対象とし、＜気象＞によって＜心＞を理解するメタファー写像について考察した。愛する人を＜太陽＞に喩えるメタファー

により、喩えられた人物の多様な側面が構造的に表現されること、その人物に対して抱く多様な感情がそのメタファー写像の帰結として導き出されることを論じた。本稿で考察するメタファーにおいても同様に、メタファー写像に関わる根源領域の事象と目標領域の事象が原因となり、その結果として感情が導き出される様子が観察できる。(1) の詩においては、財産の貸付、利息の取り立てにより財産が殖えるという事象の結果として生み出される喜びと、子供が誕生し、その子に美の遺伝子が受けつがれるという事象の結果として生み出される喜びとの間に、対応関係が成立している。この対応関係を図示すると【図３】のようになる。



【図３】子孫への美貌の継承を利殖の観点から理解するメタファーとその帰結としての感情

図の二重線矢印（⇒）は写像を、一重線矢印（→）は因果関係を表している。2 節で概観した Plutchik の研究では、外界についての認知が感情の契機となる、例えば、喜びという感情の契機となるのは「貴重なものを所有する」という認知であるということが論じられた。【図３】に示したメタファーの仕組は、Plutchik の見解と整合性をなすものである。ここでは、美貌が子孫に継承されたことによる喜びが、利殖により豊かな財産を「所有した」という認知に起因する喜びとしてメタファー的に理解されている様子が見られる。

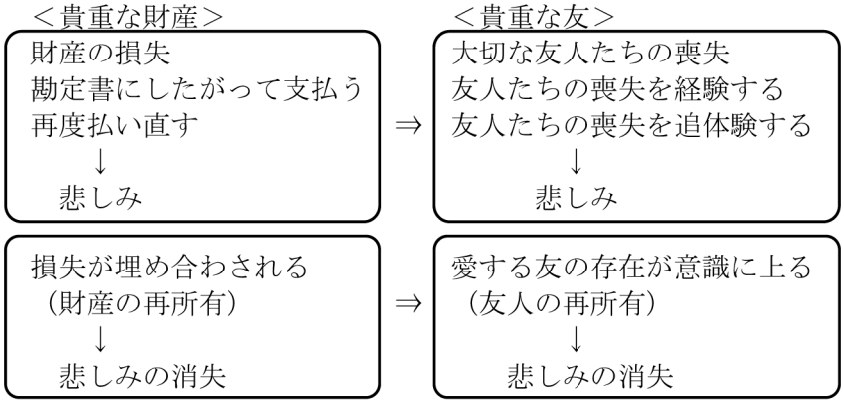
3.2　財産の損失の観点から悲しみを描くメタファー

一方、次に挙げる 30 番のソネットでは、悲しみ、および悲しみに付随する、溜息をつく・泣く・嘆くといった動作を表す語が頻出する。引用（2）の太字部分を参照されたい。

(2) When to the sessions of sweet silent thought
I summon up remembrance of things past,
I **sigh** the lack of many a thing I sought,
And with old **woes** new **wail** my dear time's waste:
Then can I drown an eye, unus'd to flow,
For precious friends hid in death's dateless night,
And **weep** afresh love's long since cancell'd **woe**,
And **moan** the expense of many a vanish'd sight:
Then can I **grieve** at grievances foregone,
And heavily from **woe** to **woe** tell o'er
The **sad** account of fore-bemoaned **moan**,
Which I new pay as if not paid before.
But if the while I think on thee, dear friend,
All losses are restor'd and **sorrows** end.　(Sonnet 30)

このように全体的に悲しみに関連する語がちりばめられた本詩では、詩人は、「過ぎさりし思い出の数々」（2 行目）を思い起こし、「わが求めた多くの物が欠けている」（3 行目）こと、「貴重な人生が空しく過ぎた」（4 行目）ことを嘆いている。詩人の悲しみは、まさに Plutchik の述べる通り、「価値あるものの喪失」の認知に基づく感情である。詩人が喪失した「価値あるもの」とは「死の果てしない夜にかくれた大切な友たち」（6 行目）、「多くの消えて行ったものたち」（8 行目）である。ここで特徴的なのは、その大切な友人たちの喪失を＜財産の喪失＞の観点から理解するというメタファー認識である。詩人の過ぎ去った悲しい記憶はいわば悲しい勘定書（the sad account）であり、過去の悲しみの記憶をたどって再度悲嘆に暮れることを「すでになげきおえた嘆きをさびしく清算して、支払いがすんでいるのに、あらためて払いなおす」（11-12 行目）と表現してい

る。大切な友人たちが自分の目の前から消えて行ったという事象によって引き起こされた悲しみが、勘定書にしたがって支払いをすることによる財産の喪失によって引き起こされる悲しみと対応関係をなし、友人の喪失の記憶によって再度引き起こされる悲しみが、過去に支払った勘定書を再度払い直すことにより引き起こされる悲しみと対応関係をなしている。そして、悲しみが終わる瞬間は「愛する友」である「きみ」を思う時であり、その時「すべての損失は埋めあわされ」るのである（13-14 行目）。この詩におけるメタファーの写像の構造を図示すると【図４】のようになる。



【図４】貴重な友を貴重な財産の観点から理解するメタファーとその帰結としての感情

同様のメタファー的認知様式は、48 番のソネットにも見られる。この詩では、詩人が愛する青年は「わが最上の歓びにして、いまはわが最大の悲しみ、こよなく大切なものであり、また、唯一の悩みの種 (Most worthy comfort, now my greatest grief, / Thou, best of dearest and mine only care, (Sonnet 48, ll. 6-7))」と詠われている。このように歓びと悲しみの両方をもたらす両義的な存在として青年を捉える詩人の認知の原因となっているのは、青年が自分に向けてくれていたはずの愛が他者に盗られてしまう可能性が出てきた (thou wilt be stol'n, I fear, (ibid. l. 13)) という事態である。その事態を、詩人は「そのきみを、そこいらの泥棒風情が狙うままにしてきたとは。私はきみを箱にいれて鍵をかけてはおかなかった。(Thou, … / Art left the prey of every vulgar thief. / Thee have I not lock'd up in any chest, (ibid. ll. 7-9))」と、鍵をかけずに金庫に入れておいた財産を喪失するという観点からメタファー的に捉えており、上記の（2）の詩と同様のメタファー写像が働いていると言える。

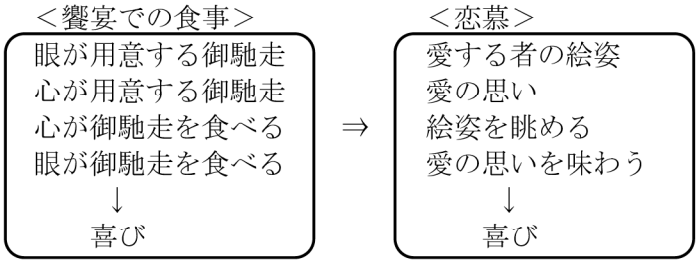
3.3 食物の獲得（饗宴での食事）の観点から喜びを描くメタファー

次に観察する 47 番のソネットは、愛する人を思うことで得られる喜びを饗宴での食事という観点から理解するメタファー認識が現れたものである。

(3) Betwixt mine eye and heart a league is took,
And each doth good turns now unto the other:
When that mine eye is famish'd for a look,
Or heart in love with sighs himself doth smother,
With my love's picture then my eye doth feast
And to the painted banquet bids my heart;
Another time mine eye is my heart's guest
And in his thoughts of love doth share a part:
So, either by thy picture or my love,
Thyself away art present still with me;
For thou not farther than my thoughts canst move,
And I am still with them and they with thee;
Or, if they sleep, thy picture in my sight
Awakes my heart to heart's and eye's **delight**. (Sonnet 47)

この詩では、詩人の眼と心が互いに助け合う様が描かれる。詩人の眼が愛する者を一目見たいと飢えこがれたり、恋になやむ心が溜息ついて胸ふたげたりしたときに（3-4 行目）、眼と心は互いを支え合う。眼の方は、「わが愛するものの絵姿を眺めて正餐となし、この絵に描いた饗宴に心を招待してやる（5-6 行目）。そして「ときには、眼が心の客となり、深い愛の思いの饗応にあずかりもする」（7-8 行目）。このように、眼と心は互いに相手に豪華な食事を提供するのである。眼が用意する御馳走は愛する者の絵姿であり、心が用意する御馳走は愛の思いである。眼と心は互いに招かれた饗宴でこれらの御馳走を味わい、喜び（delight）に満たされるのである。

この詩における、愛する人への恋慕の思いを＜饗宴での食事＞の観点から理解するメタファーは、【図５】のようにまとめられる。愛する人を求めて飢え焦がれ、溜息をつく詩人にとって、愛する人の絵姿を眺め、愛の思いを味わうという行為は、飢えた身体を満足させる御馳走と同様の効果をもたらし、同様の喜びの感情を引き起こすことがこのメタファーから見て取れる。[6]



【図５】恋慕を饗宴での食事の観点から理解するメタファーとその帰結としての感情

3.4 光の獲得の観点から喜びを描くメタファー

人間は、太陽光などの光を身体に浴びることで喜びを感じる。その喜びになぞらえて愛する人を思う喜びを描くのが次の 43 番のソネットである。

(4) When most I wink, then do mine eyes best see,
For all the day they view things unrespected;
But when I sleep, in dreams they look on thee,
And, darkly bright, are bright in dark directed.
Then thou, whose shadow shadows doth make bright,
How would thy shadow's form form **happy** show
To the clear day with thy much clearer light,
When to unseeing eyes thy shade shines so!
How would, I say, mine eyes be **blessed** made
By looking on thee in the living day,
When in dead night thy fair imperfect shade
Through heavy sleep on sightless eyes doth stay!
All days are nights to see till I see thee,
And nights bright days when dreams do show thee me. (Sonnet 43)

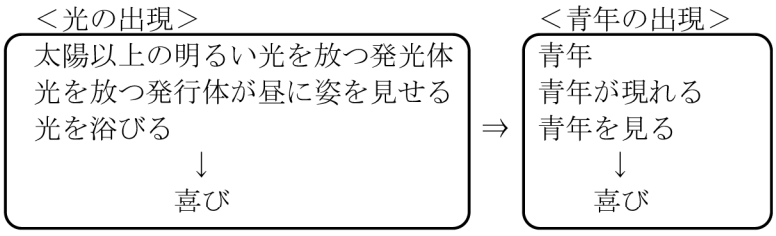
この詩では、眠っているときに夢の中に青年の幻影を見る。その幻影は「夜の暗闇を明るく照らしだす」（5 行目）、光を放つ幻影として捉えられている。[7] そして、「この幻影の本体が、昼よりもなお明るい光をはなって、明るい昼に姿を見せたらどんなに楽しかろう。」（6-7 行目）と青年の姿を見ることを夢想する。ここでは青年が、昼よりも、つまり太陽よりもなお明るい光を放つ発行体として描かれている。

---

[6] Sonnet 24 では、詩人が愛する人を思う行為を、心の画布に愛する人の絵を描き、その絵を心の画房にかけるという描写が見られる。この詩は＜食事＞という概念領域を用いているわけではないが、絵姿を思い描くという愛し方が引用（3）と関連している。

[7] Alden (1916:116) はこの 5 行目について “Whose image makes bright the shades of night.” という Edward Dowden の解釈を紹介している。

青年の姿を見るまでは昼も夜と同じだ（13 行目）というくらい、詩人は青年に恋い焦がれている。太陽以上の明るい光を浴びることで喚起される喜びの感情と、愛する青年の姿を見ることで喚起される喜びの感情の対応関係は【図６】のようにまとめられる。



【図６】愛する青年の出現を光の観点から理解するメタファーとその帰結としての感情

3.5 光の喪失の観点から悲しみを描くメタファー

前節の場合とは逆に、人間は太陽の光が黒雲に隠されると、悲しく陰鬱な気持ちになる。次に挙げる 33 番、34 番の連作は、雲に隠れる太陽に喩えて青年に裏切られる悲しみを描いたものである。（5）と（6）に引用する。

(5) Full many a glorious morning have I seen
Flatter the mountain-tops with sovereign eye,
Kissing with golden face the meadows green,
Gilding pale streams with heavenly alchemy;
Anon permit the basest clouds to ride
With ugly rack on his celestial face,
And from the forlorn world his visage hide,
Stealing unseen to west with this disgrace:
Even so my sun one early morn did shine
With all-triumphant splendour on my brow;
But, **out, alack!** he was but one hour mine,
The region cloud hath mask'd him from me now.
Yet him for this my love no whit disdaineth;
Suns of the world may stain when heaven's sun staineth.　(Sonnet 33)

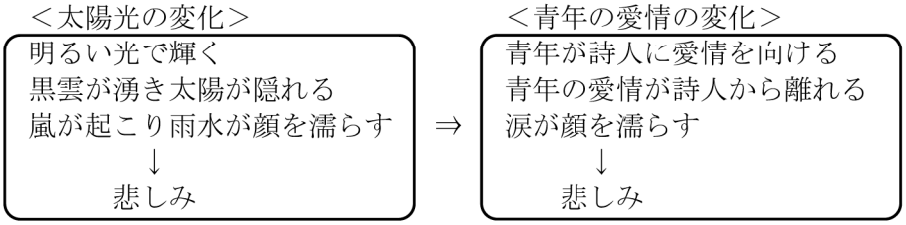
(6) Why didst thou promise such a beauteous day,
And make me travel forth without my cloak,
To let base clouds o'ertake me in my way,
Hiding thy bravery in their rotten smoke?
'Tis not enough that through the cloud thou break,
To dry **the rain on my storm-beaten face**,
For no man well of such a salve can speak
That heals the wound and cures not the disgrace;
Nor can thy shame give physic to my **grief**;
Though thou repent, yet I have still the loss:
The offender's sorrow lends but weak relief
To him that bears the strong offence's cross.
Ah, but those tears are pearl which thy love sheds,
And they are rich and ransom all ill deeds.　(Sonnet 34)

引用（5）の 1-8 行目では、朝の太陽が山の嶺々や緑の牧場に光を届けたかと思うと黒雲の陰に隠れてしまう様子が描かれ、9 行目以降では、青年を「私の太陽 (my sun)」と呼び、青年が空の太陽と同じように、「ある朝はやく、まばゆいばかりの光輝をはなって私の顔に輝いた。だが、なんということ、わがものであったのは一時間ほど、いまは空の雲が彼を私からかくしてしまった」（9-12 行目）と嘆く。青年が詩人に向けてくれる愛情を、詩人の顔に輝く太陽の光に喩え、青年の愛情が詩人に届かなくなったことを、太陽が黒雲の陰に隠れたことに喩えている。青年の心変

わりを悲しむ気持ちは 11 行目の “out, alack!” という間投詞に表されている。

続く引用（6）では、同様に青年を太陽に喩え、「なぜ、きみはすばらしい一日がはじまると言って、外套も着せずに旅に送りだしておきながら、黒雲をはなち、道のとちゅうで私を捕えさせ、その美々しい姿をむかつく瘴気のなかにかくしたのか。」（1-4 行目）と、青年の心変わりを責めている。青年が自分の裏切りを後悔して詩人の方にもう一度心を向ける様を、「雲のすきまからちょいと覗いて、嵐に打たれた私の顔の雨水をかわかす」（5-6 行目）と表現し、それではとても充分とは言えまい、と拗ねながらなじっている。

（5）と（6）に示された、太陽光の変化、光の喪失に起因する悲しみの感情と、青年の心変わりに起因する悲しみの感情の対応関係は、【図 7 】のようにまとめられる（なお、（5）と（6）に続く 35 番のソネットでは、「薔薇には棘があるし、透明な泉にも泥の底がある。雲が日や月をかげらせるし、日食も月食もある。こよなく美しい苔にも、忌わしい虫はひそんでいる。(Roses have thorns, and silver fountains mud; / Clouds and eclipses stain both moon and sun, / And loathsome canker lives in sweetest bud. (Sonnet 35, ll. 2-4))」と述べ、薔薇や泉や太陽など、自然界の美しいものにもそれに付随してその美しさを損なうものがあるという喩えを用いながら、青年の罪 (thy trespass (ibid. l. 6), thy amiss (ibid. l. 7), thy sins (ibid. l. 8)) に明確に言及し、さらにそれを「官能の罪 (thy sensual fault (ibid. l. 9)」と呼び、青年の美しさを損ない、詩人の悲しみを引き起こすものが青年の心変わりであることを示している）。



【図 7 】青年の心変わりを太陽光の喪失の観点から理解するメタファーとその帰結としての感情

4．まとめ

以上、本稿では、Shakespeare の *Sonnets* を観察対象とし、喜びと悲しみの感情が、財産、饗宴での食事、太陽光という観点からメタファー写像を通して描かれる表現例を考察した。喜びの感情は所有の認知、悲しみの感情は喪失の認知の帰結として生じるという Plutchik の見解に合致するメタファー認識が上記の引用例に認められた。本稿で考察したメタファー写像の根源領域として挙げられた＜財産＞、＜食物＞、＜太陽光＞は、いずれも人間の生命維持に欠かすことのできない資源を表している。これらの命の源を獲得すること、喪失することは喜びと悲しみの感情を引き起こす典型的要因である。*Sonnets* に描かれる青年は、詩人にとって生命維持のための資源と同等のきわめて貴重なものであり、青年の愛情を獲得できるか、あるいは喪失してしまうかは、詩人の命に関わるほどの重大事であることを、これらのメタファーは示している（同様の詩想は、75 番のソネットで、青年と詩人の思いの関係を食物と生命の関係や慈雨と地面の関係に喩えたり (So are you to my thoughts as food to life, / Or as sweet-season'd showers are to the ground; (Sonnet 75 ll.1-2))、詩人をけちな金持ちに喩え、青年をその財産に喩える(a miser and his wealth (ibid. l. 4)) ような表現にも示されている）。Shakespeare が表現する愛の喜びや悲しみが切実なものとして読者の心に響くのは、生命維持のための資源の獲得と喪失という、命に関わる切実な事態に起因する感情に喩えて描かれているからであることがうかがえる。

参考文献

Alden, Raymond MacDonald ed. (1916) *The Sonnets of Shakespeare*. Boston: Houghton Mifflin Company.

Ekman, Paul (1992) “Are There Basic Emotions?” *Psychological Review* Vol. 99, No. 3, 550-553.

Goatly, Andrew (1997) *The Language of Metaphors*. London: Routledge.

川西進（編注）(1971) *Shakespeare's Sonnets.* 鶴見書店。

Lakoff George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, George (1993) “The Contemporary Theory of Metaphor,” *Metaphor and Thought*, Second Edition, ed. by Andrew Ortony, 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, George and Mark Turner (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.

Leech, Geoffrey N. (1969) *A Linguistic Guide to English Poetry*. London: Longman.

Lyne, Raphael (2011) *Shakespeare, Rhetoric and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.

小田島雄志（訳）(2007)『シェイクスピアのソネット』文芸春秋。

大森文子（2011）「讃美のメタファーの形式と意味：Shakespeare の *Sonnets* における太陽のメタファーをめぐって」『意味と形式のはざま』大庭幸男、岡田禎之編、281-294。 英宝社。

大森文子(2015)「メタファーのデザイン」『英語のデザインを読む』沖田知子、米本弘一編、106-118。英宝社。

大森文子（2018）「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究１』鍋島弘治朗、楠見孝、内海彰編、131-150。ひつじ書房。（印刷中）

Plutchik, Robert (1984) “Emotions: A general Psychoevolutionary Theory,” *Approaches to Emotion*, eds. by Klaus R. Scherer and Paul Ekman, 197-219. New York: Psychology Press.

Plutchik, Robert (2003) *Emotions and Life: Perspectives From Psychology, Biology, and Evolution.* Washington, DC: American Psychological Association.

Schmidt, Alexander (1971) *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. 2 vols. New York: Dover Publications.

Semino, Elena (2008) *Metaphor in Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.

柴田稔彦（編）(2004)『対訳シェイクスピア詩集』岩波書店。

Smith, Edward A. (1882) *Similes and Comparisons of Shakespeare* (from the Text of the Chiswick Edition of 1826). Philadelphia: Philadelphia.

Stockwell, Peter (2002) *Cognitive Poetics: An Introduction*. London: Routledge.

Stockwell, Peter (2009) “The Cognitive Poetics of Literary Resonance,” *Language and Cognition*, Vol. 1, 25-44.

高松雄一（訳）(1986)『ソネット集（シェイクスピア作)』岩波書店。

Utsumi, Akira (2005) “The Role of Feature Emergence in Metaphor Appreciation,” *Metaphor and Symbol*, Vol. 20, No. 3, 151-172.

Utsumi, Akira (2007) “Interpretive Diversity Explains Metaphor-Simile Distinction,” *Metaphor and Symbol*, Vol. 22, No. 4, 291-312.

渡辺秀樹（2011）「シェイクスピアにおける賞賛と罵倒のレトリック：動物名人間比喩の対義・類義の構造」『文化とレトリック認識（言語文化共同研究プロジェクト 2010)』大阪大学大学院言語文化研究科。

Wilson, John Dover (1966) *The Sonnets.* Cambridge: Cambridge University Press.

吉田健一（2007)『シェイクスピア／シェイクスピア詩集（平凡社ライブラリー615)』平凡社。

The Arden Shakespeare CD-ROM. Thomas Nelson & Sons Limited, 1997.